

令和5年度 北海道手稲養護学校校内研究・研修推進計画

1 研究主題

「つながり」に着目した授業実践と授業改善 年間指導計画の活用による指導の充実

2 研究主題設定の理由

本校では令和2年度と3年度の2カ年、「社会に開かれた教育課程の実現について」を研究主題に、副題として「一人一人に応じた指導の充実を目指して」の下研究を進めてきた。当初は単年度の研究計画であったが、新型コロナウイルス感染症による臨時休校等の影響を受け、研究期間を1年延長し、1年目は新学習指導要領の基本的な方向性の一つとして上げられた「社会に開かれた教育課程」について理論研修を行った。各研究グループの成果のまとめとして「社会とのかかわりを意識した教育実践」、「将来を見据えた授業実践」、「現行の教育課程の課題確認及び新たな教育課程の編成」の3点が見いだされた。（令和3年度北海道手稲養護学校校内研究推進計画より）

その成果を生かし2年目は個別の指導計画の目標の共有や活用を通し「育成を目指す資質・能力」について明確化を図り、その具現化につながる授業改善や事例研究を取り組むことで授業改善や授業づくりについて検証を行うことができた。（令和3年度各グループによる研究のまとめより）

学習指導要領が改訂され、今年度の特別支援学校高等部の実施により新学習指導要領は全面実施を迎えた。今回の改訂の方向性としては「社会に開かれた教育課程の考え方」、「育成を目指す資質・能力の考え方（3つの柱）」、「主体的・対話的で深い学びの実現」、そして最後に「各学校におけるカリキュラムマネジメントの確立」が示されている。

本校の教育課程は「準ずる教育課程」から「自立活動を主とする教育課程」までと実態の幅は大きく、また在籍期間や退院後の転出先が特別支援学校の他、道内各地の小・中学校と多様である実態がある。この点については今年度の重点教育目標でもある「学びの連続性を意識し、将来につながる計画的で系統的な授業実践・改善」に関連し「つながり」を大切にしたい指導が必要である。

その学びの連続性や接続に着目すると今回の学習指導要領では知的障害のある児童生徒の教育について大きな改訂が図られている。本校を含む肢体不自由教育を行う特別支援学校では、多くの児童生徒が知的障害との重複障害であり、特に小学校、中学校の各教科と同様に、育成すべき資質・能力について目標や内容が構造的に示され小学校及び中学校との各教科との連続性や関連性、各教科の各段階における育成すべき資質・能力を明確にす

るため、段階ごとの目標が示された。また、各教科等を合わせて指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要であると示されている。

以上の背景を踏まえ、今年度はこれまで本校の取り組みを振り返り、評価し、改善する良い機会と捉え、今まで積み重ねてきた研究の知見や成果を生かし知的障害を併せ持つ児童生徒の指導について新学習指導要領で示されている各教科の目標や内容、そして系統性や連続性について理解を深めたり、課題を整理していくことで、継続性と一貫性につながる授業実践や学習内容をどのように学び、身につけていくことができるのかと考え、本研究主題を設定した。

◎設定理由の要約

- (1) 昨年度からの研究の継続性。
- (2) 令和4年度学校経営方針における重点教育目標との関連。
- (3) 知的障害教科における学びの連続性や系統性の整理。

3 研究目的

生活単元学習における連続性や系統性等「つながり」に着目し、指導内容等を検討し、それを基軸とした授業づくりや授業改善を行う。

4 研究仮説

各教科等の目標や生活単元学習における単元、題材について再確認を行い、幼児児童生徒が学ぶ内容等を精査、改善することで調和のとれた具体的な指導計画の作成やつながりを意識した授業実践や授業改善ができるのではないかと考える。

5 研究期間

令和4年4月～令和6年3月（2カ年計画2年目）

6 研究方法（研究グループ）

- (1) 研究グループは学部単位とし、全3グループに見直し運営する。（幼・小学部、中学部、高等部）
- (2) 初回に研究部員を含めた研究推進者を選出し、以後の推進を行う。
- (3) 研究内容は全体の研究主題を基軸として、各学部の意向や独自性を尊重する。
- (4) 話し合いの内容については毎時記録し、研究に活用していく。
- (5) 研究日の具体的な内容については「研究推進日程」を参照する。
- (6) 研究授業については12月7日（木）に実施する。
- (7) 来年2月8日に研究成果報告会を行う。

⇒研究グループの一部再編について

①小学部グループの統合について

昨年度の研究では分けて編成したが、いずれのグループも研究の方向が理論研修から開始し、生活単元学習での学習について、文化祭に焦点を当て研究を進めたこと。また学部全体で実施することの効果として、指導内容や指導方法について学部としてつながりや系統性などを見えやすい等を踏まえ、一つのグループとして再編成した。

②訪問教育学級グループの見直しについて

訪問教育学級については、今年度より昨年度に比べ教員数が大幅に人数が減少すること、訪問担当の教員も各学部にも所属すること、また昨年度の研究で一定の成果（年間指導計画の様式の作成等）が見いだせたことから、今年度から学部研究に包含することとした。

7 研究内容（前年度の経過と今年度の方向）

1年次は各グループにおいて、生活単元学習の年間指導計画や単元計画をもとに、単元配列や指導内容等、新学習指導要領で示されている各教科等の目標、内容、学習評価等について理解を深めたり、課題の整理を行う。

中学部グループ
訪問教育グループ

幼・小低グループ
小・中高グループ
高等部グループ

ここの部分の内容についてできた深めることができた！！

8 1年次の研究経過

1年次では各グループ共通して生活単元学習についての理論研修から開始した。教科等合わせた指導の捉え方、知的障害各教科の内容の把握や指導の形態の理解などを中心にグループ内で議論を深め、年間指導計画や単元計画における各教科等の扱いについて精査を行った。

課題としては、以下の3点が認められた。1点目は年間指導計画の単元配列や指導内容の具体的な改善には至ることができなかったこと。2点目として学びの連続性や系統性についての検討が不十分であったこと。3点目として学習評価について深めることが不十分であった。いずれも、時間的制約や理論研修を中心に実施したことが要因として考えられが、それとは対して、理論研修等の充実を通じて、成果としては以下の2点が成果として認められた。1点目は研究を通し、新学習指導要領の考え方、目標や内容について各グループ内で共有できたこと。2点目としては年間指導計画や単元計画について、各単元において各教科の内容が扱いについて検証する機会となった。

9 2年次の取り組み

2年次は1年次で得られた成果を基軸とした年間指導計画や単元計画等を活用改善し、児童生徒の学びの履歴（学習の習熟度）を踏まえた、授業実践や改善を通して授業研究を実施する。

年間指導計画や単元計画作成にあたり学習指導要領や単元計画を考える上での一助となる。

児童生徒の実態から指導する各教科等の内容や形態を考慮。単元から授業ではなく、内容から単元を考える。

堅苦しい形で行うのではなく、授業を見合い、意見を交流することで、新たな知見を見出したり授業改善につなげる。

・「つながり」に関連し、個別の指導計画の活用や学部内、隣接学部での学びを把握することで重複した学習内容等の改善につながるのでは。
・年間を通しての単元構成（年間指導計画）を概観することで各単元のごとの指導内容のつながりや系統性を「見える化」することで研究主題に迫れるのでは。

○研究の進め方（2年次）

○単元計画を活用した授業改善

（具体的な研究の進め方）

1 児童生徒の学習習熟度の把握と単元構想

⇒個別の指導計画等を活用し、学びの状況（現在、過去）の把握。

1年間の中で、対象の児童生徒にどのような資質・能力を身につけさせるかの視点を各グループで確認し、生活単元学習で付けたい力とはなにか、グループ全体で共有する。

2 生活単元学習の1年間の単元の構成や内容等の共通理解。

⇒1年間の単元構成を基軸に本研究で扱う単元において、全体の単元とのつながりについて。

3 単元計画の作成

⇒様式について全体で共有し、昨年度の研究の成果を活用して作成をする。

4 授業研究授業検討

作製した単元計画を基軸とした、授業研究を実施する。

・授業改善を図り、指導の工夫や充実を目指す。

10 研修について

全体研修会を5月25日（木）に実施する。肢体不自由のある児童生徒の障害の理解や支援方法等の内容とする。

11 研究・研修推進日程

日 程			校内研究・研修に関わる内容
4	19	水	職員会議（年間推進計画の提案）
4	27	木	研修日①（グループ研～研究推進者等の選出、研究推進方法についての共通理解）
5	25	木	研修日②（児童生徒理解研修～対面で体育館で実施予定。） 演題：「肢体不自由のある幼児児童生徒の持てる力を高めるために」 講師：北海道立特別支援教育センター主任研究員 大西 修 氏
6	29	木	研修日③（グループ研） ・ 個別の指導計画等を活用し、1年間の学びを通して児童生徒の目指す姿の共有。
8	30	水	研修日④（グループ研） ・ 単元計画の作成～生活単元学習の1年間の単元の構成や内容等の共通理解と授業研究を想定する単元についての目標や評価規準、個別の目標についての検討。
9	28	木	研修日⑤（グループ研） ・ 単元計画の作成～単元全体の主な学習活動や指導の流れが明確になるよう題材、学習活動等についての検討。
10	26	木	研修日⑥（グループ研） ・ 単元計画の作成～授業研究時の本時の計画についての検討。
11	30	木	研修日⑦（グループ研～授業研究に向けての指導案等の最終確認）

1 2	7	木	校内授業研（小学部、中学部・高等部の生活単元学習の指導グループで実施予定。詳細な時程については後日提示する。）
1 2	2 1	木	研修日⑧（グループ研～授業研究を受け、1年間の研究を振り返り成果と課題についてまとめる。）
1	3 1	水	研修日⑨（グループ研～発表内容を全体で共有する。）
2	8	木	研究日⑩：研究成果報告会（対面で実施予定）
3	7	木	研究日⑪：校内研究のまとめと次年度の方向性

1 2 校内研究における全体関連図

学校教育目標

幼児児童生徒の学習や身体状況に応じた教育を行い、一人一人の能力を伸ばすとともに、社会の一員として参加することを支援し、心豊かに自立した生活する人間を育てる。

重点教育目標

「学びの連続性を意識し、将来につながる計画的で系統的な授業実践・改善」
(今日付けた力(できたこと)は将来の何の力につながりますか)



研究主題

「つながり」に着目した授業実践と授業
～年間指導計画の活用による指導の充実～(2ヶ年計画)



【研究目的】

各教科等における連続性や系統性等「つながり」に着目し、指導内容等を検討し、それを基軸とした授業実践や改善を行う。

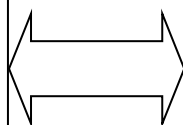
【研究仮説】

各教科等の目標や単元、題材について再確認を行い、幼児児童生徒が学ぶ内容等を精査、改善することで調和のとれた具体的な指導計画の作成やつながりを意識した授業実践や授業改善ができるのではないか。



【校内研究の取り組み】

- ・1年次で各グループにおいて、生活単元学習を中心に、教科等合わせて指導についての理論研修を実施した。その成果を土台とし年間指導計画や単元計画から、各教科等の扱いについての精査を行った。
- ・2年次は1年次で得られた成果を基軸にして単元構想、単元目標、評価規準等を明確にした単元計画を活用し、合わせて幼児児童生徒の学びの履歴(学習の習熟度)を踏まえ、授業研究を行う。
- ・研究授業については、12月に校内授業研究会を実施する。
- ・グループごとに研究のまとめを行う。(まとめの方法はポスター発表形式とする)各グループの研究のまとめを受け、研究全体のまとめ(仮説に対する考察)を研究部で行う。



【校内研修の取り組み】

- ・肢体不自由と病弱併置校であることを踏まえ、幼児児童生徒理解や障害理解に関連した全体研修会等を実施する。内容については現在、以下の内容を予定する。
- 全体研修会(5月)
 - ・肢体不自由児の支援や指導の基礎、基本的内容について研修会を実施し、各教員間の共通理解を図る。
- 北海道肢体不自由教育専門性向上セミナー(7月)
 - ・今年度と次年度、本校を会場として開催される北海道肢体不自由教育専門性向上セミナーを通じて、肢体不自由教育に関わる知見の向上を目指し、本校教職員の資質の向上を図る。



研 究 目 的 の 達 成



今年度の校内研究、校内研修の成果と課題を生かしながら、令和6年度以降の校内研究推進計画の内容に反映させていく。

単元計画案

学級・学習グループ											
単元名											
単元の目標											
知識・技能			思考力、判断力、表現力			学びに向かう力、人間性等					
(例)・完成までの手順を理解して、必要な道具を使い、製作することができる。 文末～することができる。			・年間指導計画に示された目標や内容を参考に設定する。 ・児童や生徒に対して、「このようになってほしい」姿「このような力をつけてほしい」姿を明記する。								
			文末～することができる。			文末～しようとする。					
単元で育成する資質・能力（評価規準）											
(例)・完成までの手順を理解して必要な道具を使い、製作しようとしている。 文末～している。			・単元目標に対して、児童生徒のどのような姿が見られれば、「概ね満足できる」と考えるのかを具体的に設定する。								
			文末～している。			文末～しようとしている。					
単元の指導計画											
回	月日	時数	題材・主な学習内容	本時の目標	資質・能力			授業の視点			関連する教科の内容
					知	思	学	主	対	深	

・目標達成のために、単元全体の主な学習活動や指導のながらが明確になるように記載する。
 ・扱う教科の内容の欄は「国語 A聞くこと・話すこと」など、内容のまとまりを記載する。

各学習ごとに3観点と授業の視点を明記する。

	単元の個別の目標	
	単元の個別の目標	単元で扱う教科
A	• 単元の目標を基に、単元を通して「このようになってほしい」姿、「このような力をつけてほしい」姿を具体化した個別の目標を設定する。 • 扱う教科には、段階まで記入する。 • 扱う教科を踏まえ、「単元の個別目標」を記載する。	
B		
C		